

古代の村の暮らし —大井鹿島遺跡—

大井鹿島遺跡の概要

大井鹿島遺跡は昭和58年（1983）、品川区立品川歴史館（品川区大井6丁目11番1号）の建設工事中に発見された。遺跡名は、この地域の旧字名鹿島谷から来ている。広さ約1500㎡の発掘範囲からは、26軒に及ぶ^{たてあなしきじゆうきよ}堅穴式住居跡群と土器、^{ぼうすいしや}紡錘車、^{とし}砥石などの生活用具が見つかったが、土器の特徴などからみてこの遺跡は、古墳時代後半から奈良・平安時代にかけて断続的に形成された古代の村の一部であると考えられる。品川区内における古代遺跡の調査はこれが初めてで、当時の様子を知る貴重な資料となっている。

その後、品川歴史館周辺地域を含めて平成21年（2009）までに第9次におよぶ調査がおこなわれ、集落の中心地域の発掘はほぼ完了した。遺跡の範囲は、台地の端とそれに続く緩やかな斜面にまで広がり、住居跡は合計45軒になった。この地域は、古代東海道の駅家「大井駅」の推定地の一つに挙げられている。現在のところ、直接駅家の存在を窺わせるような遺物は出土していないが、大井鹿島遺跡の存在は大きく、今後の調査の進展が期待されている。



▲昭和58年時点の遺跡全景（右手 池上通り）

古代の土器

品川歴史館の展示室(1)に展示されている土器には赤褐色のものと青灰色のものがあるが、これらはそれぞれ製作方法が異なっており、前者を土師器、後者を須恵器と呼んでいる。

土師器は弥生土器の系統を引くもので、紐状の粘土を巻き上げて形をつくり、野焼で焼きあげる。素焼きで耐火性に優れているため、甕等の煮炊き用土器を中心に、壺、碗などがつくられていた。須恵器導入以後はその形態や製作技術を取り入れたものや、耐水性を増すために表面に炭素を吸着させた黒色の土器が作られるなど、様々な変化をとげながら、古墳時代から奈良・平安時代を通じて作り続けられた。

須恵器の系譜は朝鮮半島に求められる。5世紀頃の日本には、朝鮮半島から様々な文物が伝えられたが、須恵器の製作もその折に渡来した工人（職人）によって始められたといわれている。粘土を材料とし、ロクロを使って成型が行われる。そして、地下式の窯（登り窯）を使って1000度以上の高温（土師器は800度程度）で焼きあげられる。土師器に比べ堅牢で耐性に優れているので、壺などの貯蔵容器や、坏などの



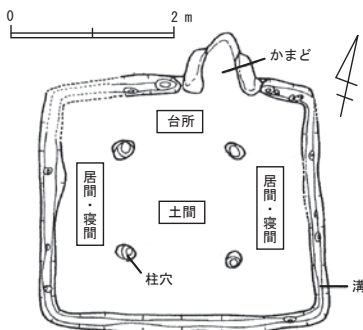
▲大井鹿島遺跡出土遺物

飲食器がつくられた。そして、古墳時代後半から鎌倉時代頃まで使われ、その技術は後の中世陶器に受け継がれていったのである。

古代の住居

品川歴史館の庭園の一角には、大井鹿島遺跡の調査で発見された古代の住居の跡が復元されている。四角く掘り下げられているところが当時の住居の床にあたり、柱を建てるための穴（支柱穴）があいている。屋根などの建物の上屋は発見例が少なく詳しいことはわからないが、おそらく柱の上に梁を組み、カヤなどの植物を使った屋根が地表まで葺きおろされていたものと思われる。壁際の溝は排水用あるいは壁板を立てるためのものと考えられている。このような構造の竪穴式の住居は縄文時代から平安時代頃まで、長期にわたってつくり続けられた。

住居の北側の壁際には竈がつくられている。竈は炊事のための施設で、5世紀になって朝鮮半島から伝えられて以後、急速に普及した。本体は粘土や砂を材料につくられており、補強のために土器を芯として用いているものもある。火を燃やす部分（炊き口）からは煙を屋外に排出するための穴（煙道）が伸びて煙突のような役目をしている。また、燃焼部中央からは上にかけた甕を支えるための土製の支脚が出土している。



▲竪穴住居跡と間取り（想定図）

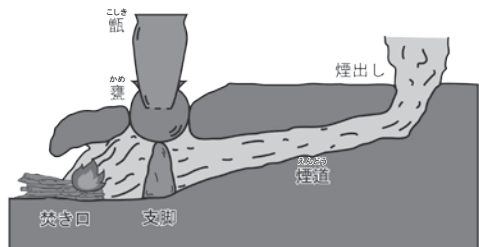
古代の村のしくみ

大井鹿島遺跡に営まれた村は、奈良時代になっても依然として官衙関連遺跡との比較から庶民の住まいは竪穴式住居であった。住居は半地下式になっており、入口は普通、南向きにつくられ梯子のようなもので出入りしていたようである。入口の反対側の壁際には竈が作られており、日常の炊事はここで行われていた。家の中央部の床はよく踏み固められており、土間になっていたと思われる。恐らくここで日常の作業が行われていたのであろう。その左右の壁際には敷物などを敷いて居間や寝間として使っていたと思われる。このように同じ家のなかでも、ある程度の使い分けがされていたようである。

次に暮らしの中で使われた道具について見てみよう。まず、炊事場である竈の周辺には水瓶や食器が置かれていた。私たちが皿と茶碗を区別して使っているように、古代の人々も用途によって様々な形の土器を使い分けていた。例えば、炊事用としては、甕や壺が、そして個人用の飲食器としては坏や盤状坏があった。

また、この当時には鉄製の農具や工具もかなり普及してきたと考えられ、大井鹿島遺跡から出土した砥石がこれらの鉄製品の存在を物語っている。

そのほか、糸を紡ぐための紡錘車も多数出土した。当時の糸の材料としては、絹などのほか、麻や藤、葛などの植物繊維が考えられる。現在、日本各地にわずかに伝えられている藤布、葛布のような布地が織られていたのであろう。



▲かまどの構造と名称